病院図書室研究会

Japan Hospital Library Association

後 藤 久 夫*

東京都養育院老年学情報センター

発 足 ま で

病院図書室研究会（通称病図研）は昭和51年3月に設立総会を開き、本年度で8年目を迎えます。

さて、当会設立の前後は社会的・経済的にも数々の変化が起き、社会全体がその対応に必死となっている時代でもありました。東大闘争を中心とした大学闘争は各地に広がり、その影響は社会の様々な側面に及びました。特に医学部では研究・臨床面の中堅となる人々に新天地を求める動きもありました。またインターン制度が廃止され、代って臨床研修制度が発足しました。その一方で、高度経済成長時代に計画された行政施策が医療面でも次々と実施に移され、小児・救急・がん等の成人病医療を中心とした高度専門医療施設が特に地方自治体の手によって建設されました。また民間の市中病院も設備投資を活発に進めておりました。こうした需要と供給の両面にわたる変化が、病院組織における新たなマンパワーの必要性を呼び起し、それ以前とは比較にならぬほどの病院図書室を生み、新任の司書が多く採用されたのであります。

こうした背景の中で、病院図書室同士が相互に助け合い啓発しあいながら、より効果的に利用者に情報を提供できるように、病院図書室の質の向上を図ろうという動きが出たのも、適当な指導者もおらずモデル図書室も少なかった当時としては当然といえるかと思えます。加えて、昭和49年秋の近畿病院図書室協議会の発足も大きな刺激となったことは申すまでもありませ

ん。

病図研設立総会当日、聖路加国際病院の足立純子さんは次のように発会に至るまでの歩みをまとめております。

近畿地区での活動に遅れること約一年。関東地区（厳密には、東京・神奈川地区）にも、今までバラバラだった病院図書室同士が、相互に助け合い、啓発し合いながら、より効果的に利用者に情報を提供できるように、病院図書室の質の向上を図ろうという動きが起りつつある。

病院における図書室の役割とは、病院の持つ三つの大きな機能、即ち、診療、教育、研究を助ける情報を提供することであるといわれている。殊に、日常の医療活動が多岐にわたるようになってきた現在、病院図書室は診療スタッフである医師のみならず、看護部門、検査部門をはじめとして、各種の診療補助スタッフからも様々な情報提供を求められるようになってきている。しかしながら、肝心の図書室に目を転じてみるならば、これらの利用者の要求を満たし、かつ、病院における情報の中心としての役割を果たしていると、自信をもって答えられる図書室は一体いくつあるであろうか。確かに病院図書室の多くは、大学図書館や公共図書館に比べて、資料、人員、設備、教育をはじめとして、多くの制約の下で業務を遂行することを要求されている。しかも、病院図書室間の格差というものは、大学図書館のそれに比べて、一段と激しいものがあり、これらの現実が病院図書室相互協力の円滑な推進を妨げる原因の一つになっているように思えるのである。病院図書室の職員は、多くは、一人で何役もの仕事を

* Hisao GOTO: Gerontological Information Center, Tokyo Metropolitan Geriatric Hospital, 35-2 Sakae-cho, Itabashi-ku, Tokyo 173, Japan.
(昭和59年5月14日 受理)

こなしている。それ故に、より一層、幅広く情報交換を行ない合理的に図書室を運営、管理する必要があると思う。今更、改めてこのようなことをいわなくても誰しもが思うことであるが、現実的には、各々の図書室内だけの仕事を処理することで精一杯で、それ以外の仕事はそれが非常に有益なことであるとわかっていても、積極的に活動するだけの余裕はないというのが各病院図書室に勤務している者の本音だったのではなからうか。しかしながら、前述の如く近畿地区での活発な活動に刺激され、少しでも多くの図書室に声をかけ、実際に動き始めてみようということになった。昨年（昭和50年）の5月の事である。現在、世話人を引受けている9病院図書室が顔を合わせてみたものの、病院図書室そのものに関する情報量がいかに少ないかを改めて思い知らされたただけであった。とにもかくにもまず病院図書室の実態を少しでもつかまなければならないということになり、その結果が今回アンケート調査結果報告になっている。先程も述べたように一口に病院図書室といってもその内容は千差万別である。大学図書館なみの蔵書、設備を有する所から無人の図書室まで。唯、差異はあっても医療の第一線にある病院の図書室とは、一人でも多くの患者さんが、よりよい医療を受けることができるように、病院の各部門のスタッフに情報を提供するという仕事を通して、間接的ではあるが、地域医療を Back up しているという点ではどこの病院図書室も変るはずはないのである。これから先、このような会を推し進めてゆくには各会員の努力と協力を何よりも必要とするであろう。どこでも人員に余裕などあろうはずはないし各病院図書室が夫々強い個性を有しているからである。しかし、一つの病院図書室だけでできることには限度があるし、又、広い視野にたって医学図書館界の一部門を占める病院図書室界というものを考えてみる必要があろう。この半年間、試行錯誤の連続であり、これから先も当分続きそうではあるが、歩みを止めてしまわぬ限り、成果は何かありそうである。病院図書室を利用する人々、そして我々が利用者に良い情報サービスを提供することによって、恩

恵を受けるかもしれない患者さんという存在を常に忘れずに、この会を発展させていきたいと願っている次第である。

会 則

以上のような経緯で発足した当会は、当初より個人会員制をとっておりましたので“本会は病院図書室職員および病院図書室関係職員でこれを構成する”と規定しました。しかしその後、約半数近くの職員は会費を公費で納めていること、また年度途中での交替も多いことから「医療情報業務を旨とする組織を有する機関」としましたが、組織原則を機関加盟としたものではありません。

〈病院図書室研究会会則〉

第1条（名称）

本会は病院図書室研究会という。（以下本会という）

第2条（目的）

本会は会員相互の緊密な連絡と協力、研鑽により病院図書室の向上、発展を目的とする。

第3条（組織）

本会は医療情報業務を旨とする組織を有する機関又は病院図書室職員並びにこれらの業務に関係する職員をもってこれを構成する。

第4条（事業）

本会はその目的達成のために次の事業を行なう。

- (1) 会報の発行
- (2) 加盟会員の相互連絡機能の増進
- (3) 関係諸団体との協同連絡
- (4) 研修会等の開催
- (5) その他必要と認められる諸事業

第5条（役員）

本会は次の役員を置き会の運営を行う。会長は幹事の互選で選出し総会の承認をえるものとする。

会長 1名 幹事 8名 監査 1名

第6条（総会）

*総会は本会の最高議決機関であり年1回開催

される。

- *総会は会長がこれを招集し会員の2/3以上の出席をもって成立する。
- *議決は出席者の過半数をもって成立する。
- *会長が必要と認めた場合または会員の1/3以上の請求があった場合は臨時総会を開くことができる。
- *総会では本会の活動方針, 予算, 決算の承認, 役員の選出, 会則の変更等を決定する。

第7条 (会員の義務)

本会の会員は次の義務をおうものとする。

- (1) 会費の納入 年間, 会員1名につき5,000円とする。
- (2) 総会への出席
- (3) 本会の諸事業への参加, 協力

第8条 (会計)

本会の経費は会費, 寄付金, 賛助金, 事業収入をもって充てる。

第9条 (事務局)

本会の事務局は会長の所属する病院図書室に置く。

(付 則)

1. 本会の役員任期, 会計年度は総会より次期総会までとする。
2. 本会則に定めていない事項については内規で定める。
3. 本会則は昭和51年3月7日より発効する。

事 業

これまでの事業としては, 個人会員制を建前としていることから, 相互連絡等を図る目的で会報の発行と研修事業を主としております。

研修会については, 年度当初の総会開催時に講演会, 夏季に日本病院会・近畿病図協・当会の三者共催による全国勉強会, 秋季に図書館・情報関係機関の見学会, 冬季に研修会, と年4回開催しております。

また会報については, ほぼ行事の終了後約1ヶ月を目途に年4回発行しております。

発足時に行った病院図書室の実態調査の対象が東

京・神奈川地区だったためでしょうか。今もって関東地区だけと思われているようですが, むしろ岐阜・富山県を境にそれより北側の病院が加入しているのが実態です。会員数94名, 86機関, その内訳は病院64, 研究所3, 大学10, 複合施設(病院と研究所のあるところ)6, その他8, 個人3となっております。大学所属の場合は本会の趣旨に賛同してくれた意味合いが濃い例かと思います。

現在持っている問題点

当会が今日抱えている問題点は少なくありません。

第1に, 昭和51年当時30名ほどだった会員も100人近くに増えた今日, 会員の要望も多様化しそのニーズにどのように応じるかが最も大変な問題かと思えます。例えば, 研修事業にしてもどのレベルにあわせて計画化したらよいのかということは, 役員一同おいに頭を悩ます点であります。

第2に, 増大する情報指向的要求つまり文献の相互貸借などの要求にもどう対応するか, 特に本会は個人会員制をとっているだけに難しい問題となっております。

第3に, 研修事業等の内容を高度化していきますとどうしても実習・演習が中心になりますが, 適当な(30人位が演習できる)施設も少なく, 講義形式になりがちな点も問題です。これまではなんとか幾つかの大学の御好意にすがってきましたが, 土・日曜日の開催が多く特定の大学だけにお願いするのも誠に心苦しい限りです。

第4に, 会員は圧倒的に女性が多く結婚・出産・育児といったライフサイクル上の諸変化が直接, 会活動にも影響を及ぼします。2児の出産終了まで統計上は5.5年ほどかかるわけですから, この間の格差をどのようにして埋めるのか, 例えば託児所付きの研修会も何回か役員会で話題になったこともあります。

JMLA との関係

実際のところ, 研修会を開催したりする場合, 人的にも施設のにも多くの場合, 大学にお世話になることが少なくありません。文献となると70~80%近くは依

頼る結果となります。同じ病院の集まりでも近畿病
図協は機関会員制をとり、相互貸借もかなりシステマ
チックにし成功している例かと思います。それでも
70%近くは大学に頼らざるを得ないのも実情だと思
います。最も著名な病院ですらその蔵書量は大学の半分
程度にすぎないのですし、公的ナショナルセンターの
ない現状では大学医学部図書館群を社会的資源として
把え利用していくのが、今考えられるベストな方法か
と思います。但しその場合でも利用する側の道義的責
任としても「例外の原則」によって対応するのが適当
かと思います。すなわち何でもかんでも大学に依頼す
るのではなく、年代的に古いもの、雑誌の性質的にみ
てマイナーなものを依頼しポピュラーで、年代の新し
いものは病院図書室群の間でできるだけ処理できる方

向へもっていくことが必要と思います。また併せて病
院図書室側では会員への教育を徹底し、書誌的事項の
再確認などを励行させることも肝要ではないでしょう
か。

いずれにしても、近年病院図書室の数だけは増えて
きたものの、その実態は一皮めくればまだまだ歴史も
浅く、地域的な跛行性も強く不十分な点多々あるか
と思います。少しずつでもレベルアップできればと思
いつつその努力を重ねているのが現状であります。

〈病院図書室研究会事務局〉

東京都養育院老年学情報センター内

〒173 東京都板橋区栄町35-2

Tel. 03(964)1131 ext. 2432

積極的に投稿を!!

「医学図書館」は会員みんなで作りあげる雑誌です。

最近、嬉しいことに投稿が多くなりました。でも、もっと
もっと会員皆様の声を盛り込み、より充実したものになりたい
と思っています。積極的な投稿をお待ちしています。又、地域活
動、ニュース、あるいは意見、提案などもお聞かせ下さい。

ご一報頂ければ所定の原稿用紙をお送り致します。

〒160 東京都新宿区西新宿6-7-1

東京医科大学図書館

高野 史子

TEL 03-342-6111 内線 403